

「って」の許容度

——1992年と2003年の調査結果から——

朴 序 敬

1 はじめに

「って」は、指示しているものが何であるか分からない場合、その言葉をそのまま引用し提示するマーカーとして、また、話し手の発話意図や内容が分からない場合、文の断片に付いて問い返し、聞き返しの表現として用いられる伝聞・引用形式である。この際の引用というのは内容を捉えることではなく、言葉の表面だけを捉えることである。つまり、音声(音)的には知っていても、内容(中身)が分からない場合に引用の「って」が使われる。このように、「って」の本来的用法は記号内容が分からないものであることを示すメタ言語的なものであると思われる。しかし、よく知っていることにも「って」が付く例が見られる。以下のような例である。

- (1) イチローってすごい選手だね。
- (2) 私ってだめね。

さらに、「って」は、発話場面において話し手と聞き手の間で共有されている指示対象を示す指示詞にも付くことがある。

- (3) これって何ですか。
- (4) それっておかしいね。

実際の日常会話場面で「って」が「これ」、「それ」などの指示詞に接して現れる場合については既に藤村(1993:45-56)、丹羽(1994:79-109)において言及されている。また、

¹ 「って」に関する先行研究には、文末表現としての捉え方と主題提示形式としての捉え方(高橋1993、丹羽1994)がある。さらに、文末表現としての「って」については述語が省略された伝聞・引用構文として捉える立場(森山1995)と「って」を一つの文末詞として捉える立場(許1999、鎌田2000)がある。

朴 序敬

「私って」のような使われ方について三枝(1995:105-127)は、話し手自身の事柄あるいは既知の人の性格、性質を論じる場合に使われることが多く、「って」を使うことで自分の考えをストレートに出すのを遠慮し、一般化したいという心理が働く、と指摘している。このように、本来必要とされないところで使用される「って」、よく分かっているものを取り立てる「って」は指示対象に対する話し手の何らかの心的態度を表すと見られ、その心的態度は自分の考えをストレートに出すことを避ける「和らげ」や一般化に通じる面があると思われる。特に「私って」、「これって」は、若い世代を中心に用いられることから、「って」の使われ方は一部「若者言葉」²と認識される場合がある(米川1999:76-79、榊原2003:17-18、梶原2003:113-123)。若者言葉とは若い世代を中心とする人々に特有の言葉とされるものであり、その多くは次々に現れては時間の経過と共に消滅してしまう傾向にある。しかしながら、藤村(1993:45-56)は文法性の劣る「これって」、「それって」、「今日って」などが許容され、しかも一時的な流行に終わらずに生き延びる可能性があることについて次のように述べている。

- (5) (目の前のものを指さして)
これって何ですか?
- (6) 今日って何日ですか?
- (7) それってほんとに「個の成熟」?

(5)、(6)、(7)における「これ」、「今日」、「それ」は直示詞であって、モノを直接指示している。これらの記号はモノと一対一の関係をつくらないためにモノの名前ではなく、<記号の内容=モノの属性>という等式を成立させない。したがってメタ言語的解釈も、名前しかわからないモノの説明という解釈も全く不可能であり、それがこのような文法性の劣る原因となっている。ただし、(5)、(6)、(7)を観察すると、「これ」、「今日」、「それ」が正体のよくわからないものを指していることはわかる。「これって何?」は許容されても、「これってコンピューターだよ」は許容されにくいことがそれを物語っている。名前しかわからないモノから、単に正体のわからないモノへの移行の道筋には論理性があり、突然変異的なものではないといえるだろう。それゆえに、(5)、(6)、(7)のような用法は、一時的な流行に終わらず生き延びる可能性が

² 米川(1998:15)は「若者語」を次のように定義している。

「若者語とは中学生から30歳前後の男女が、仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。また時代によっても違う」

あるように思う(藤村1993:54-55)。

即ち、「これって」、「私って」のように一般には若者言葉と言われている表現も、コンテキストによっては新しい形式として社会一般に承認されるようになる可能性があると思われる。このように、ある形式が社会一般に承認されるまでの過程における現象は「ゆれ」と定義される。あることを表わすのに二つ以上の語形その他がある時に「ことばのゆれ」がある、と言う。そして、そのゆれには一人の人が二つ以上の言い方をする場合の一個人内でのゆれと、一つの言語社会に属する個人個人が二つ以上の言い方のうちどちらか一つだけを使う場合の二つがあるとされる(野元1994:6-13)。一言で「ゆれ」と言っても文法・語彙のゆれ、アクセントなどの音声的ゆれなど、「ゆれ」という語は様々な現象に関して用いられているため、その概念をひと言で言い表すことはできない。しかし、本稿での「ゆれ」の定義は土井(1964)の以下のような記述に従うものとする。

ある言語形式が、交替や変化現象によって、新たな語形や意味を獲得し、それがラングとして社会一般に承認されるまでの過程を「ゆれ」と呼ぶ。

本稿では「って」に関して、その「ゆれ」が考察対象となるが、その場合の「って」は、冒頭で述べたようなよく知っているもの、よく分かっているもの、近いものを取り立てる「って」である。これらの使用には地域的差や個人差もあるように思われるが、本稿では時間を軸に1992年の大学生と2003年の大学生の「って」の許容度の差とその許容度に見られるある種の傾向について考察し、「って」がどれほど社会一般に定着しているかについて述べ、許容度の変化をもとにして「ゆれ」について検討する。また、2003年の大学生と40代以上の中高年層を比較し、許容度の世代間の相違の有無、男女差、さらに40代以上の中高年層における許容度、語感を調べ、「って」を若者言葉と見る見解の妥当性について検討する。

2 アンケートと調査方法

「って」の使用にあたっては様々な要因が考えられる。藤村(1993)に述べられているように、引用形式にはそれ自体にその内容が不明であるという前提があるため、「って」の名前しか分からないものを表す用法が、よく分からないものを指す用法へ、さらにただ単に分からないものを指す方向へと変化していると考えられる。名前しか分からないもの、よく分からないもの、そして話し手にとってよく分からない、内容不明のものは話し手の

朴 序敬

縄張りに属していない要素である。³ このように、「って」は話し手の縄張りに属さないソトのものに対して使われやすく、よく分かっているもの、近いもの、ウチのものに使われる場合は捉え直しとして、指示対象に対する話し手の何らかの心的態度を表わそうとするものであると考えられる。項目設定は大きく、共通知識や一般知識、発話場に存在して認知的にすぐ知覚できるものなど、定名詞句や人称代名詞、指示代名詞、つまり、常に指示対象が一致するものに付く場合の「って」と、問い返し、聞き返しとして正体の分からないもの、指示対象が一致しないものに使われる「って」の二つに分けられる。さらに指示対象が一致するものは、よく知っているものを捉え直す「って」と、指示対象をぼかすことで和らげの表現として用いられる「って」に分類できる。話し手と聞き手の間にその指示対象が明確に一致していることが分かっているものをまるで「ソト」のものであるかのように捉えようとする「って」は、既にある知識の中に新たな属性として取り入れることで、情報の更新を行おうとするものであり、その意味で、よく知っているものの捉え直しとしての「って」と関わっていると言える。

アンケート項目はこのような前提に基づいて作成されている。1992年のアンケートは藤村が作成し、大学生を対象に行ったものである。筆者はそれと全く同じ49項目を2003年の大学生、さらに40代以上を対象に行った。本稿では藤村の調査も含めたこれらすべてを使用した。質問は全部で49項目であり、各項目にそれぞれ①「全く自然」、②「自然だが若者言葉的(年配の人は言わないと思う)」、③「なんとなくおかしい」、④「かなりおかしい」の4つの選択肢を設定した。アンケート項目はこの論文の末尾に付録として添付する。

調査は日本語を母語とする名古屋大学の学生である、男女206名(1992年と2003年の合計)と、愛知県在住の40代以上の男女94名を対象として行われた。

表1 被験者の平均年齢(2002年12月～2003年3月実施)

	「1992年」大学生	「2003年」大学生	「2003年」40代以上
男性	18.8歳(52名)	19.6歳(57名)	50.4歳(49名)
女性	18.4歳(43名)	19.2歳(54名)	54.1歳(45名)
平均年齢(合計)	18.6歳(95名)	19.4歳(111名)	52.1歳(94名)

※ 大学生(1992)の平均年齢は年齢未記入者11名を除く84名のもの、40代以上の平均年齢は年齢未記入者4名を除く90名のものである。

³ この概念は神尾(1990)の「縄張り理論」によるものである。話し手と聞き手の間での情報への関わりは「って」の使用の重要な要因の一つであると考えられる。

3 結果と考察

3.1 1992年と2003年の大学生の比較

まず、1992年と2003年の大学生を対象としたアンケートについて述べる。各項目ごとの回答に占める4つの選択肢の選択比率は<図1>のとおりである。以下、今回は4つの選択肢から「全く自然である」と「自然だが若者言葉的」の答の合計を「自然である」という判断であるとみなす。しかし、必要に応じて「全く自然である」と「自然だが若者言葉的」を分けて考察する。

全項目に対して「自然である」(①と②の合計)と判断された比率は1992年が62.3%、2003年が64.9%で、2003年において増加している。1992年と2003年の両方において「おかしい」という判断(答③と答④の合計が50%超となるもの)がなされたものは、(8)、(13)、(15)、(18)、(19)、(26)、(30)、(34)、(35)、(40)、(44)の11項目である。項目(9)、(37)、(41)に関しては2003年の大学生が47%、48%、46%となっており、「自然である」が50%以下であったのに対して、1992年の大学生の場合は56%、54%、61%であり、「自然である」が50%以上であった。そして、1992年は37項目において「自然である」(答①と答②の合計が50%超となるもの)と判断され、2003年はその中の34項目において「自然である」と判断されている。1992年、2003年共に、共通した34項目において「自然である」という判断が50%を越えている。その内、25項目において2003年の大学生の方が許容度が高く、8項目においては1992年の大学生の方に許容度が高く現れた(1項目は同率である)。1992年、2003年共に「自然である」と判断された34項目について1992年と2003年の許容度の差を見ると、20%以上アップしたのは、項目(5)+23%、(12)+22%、(36)+26%、(43)+20%、2003年において逆にダウンしたのは(45)-21%である。いずれにしても、これら5項目には20%以上の差が見られたのに対して、その他の項目においては15%以内の差となっている。⁴そして、項目(45)以外はいずれも2003年の方が許容度が上昇している。全体的に見て2003年の許容度が増加しているが、2003年の大学生の方が高い許容度を示す25項目を見ると、いずれも1992年に比べ「自然だが若者言葉的」の比率が減って、「全く自然」の比率が増えていることが分かる。そして1992年の方が高い許容度を示す8項目を見ると、いずれも2003年に比べ「若者言葉的」の比率が高いことが分かる。1992年、2003年それぞれの大学生が「って」をどれほど「若者言葉」として意識しているのかに関して、許容度が50%を越えている34項目の「自然だが若者言葉的」と「自然である」の回答に基づいて観察して見ると、1992年の大学生においては12項目((4)、(5)、

⁴1992年を基準とし、1992年より増加した場合は「+」、減少した場合は「-」として表記した。

朴 序敬

(6)、(10)、(11)、(12)、(14)、(16)、(17)、(25)、(31)、42(2))において「自然だが若者言葉的」の選択肢が優勢に現れたのに対して、2003年の大学生においては1項目のみ((10)私(僕)、地震ってこわい)において「自然だが若者言葉的」の選択肢が優勢に現れた。これは、2003年の大学生が1992年当時の大学生より「って」を若者言葉として強く意識していないことを示していると考えられる。

以上のような、1992年と2003年のアンケートの比較から、以下のことが言える。

2003年は1992年に比べて「自然である」(①と②の合計)が全体で62.3%から64.9%に(「自然である」が50%以上の項目に限れば73.4%から78.9%)増加している。また、「全く自然」は32.7%から41.7%に増加し、「自然だが若者言葉的」は29.5%から23.1%に減少している。⁵ 「自然だが若者言葉的」が減少したことから判断すると、1992年の大学生は2003年の大学生に比べ、「って」を若者言葉としてより強く意識していたと考えられる。ただし、全体として「自然である」が増加しているのに対して、(9)私(僕)、宮沢りえって嫌い、(37)(名大の先生が南山大学の先生に)うちの大学の学生ってより勉強するよ、(41)君の目ってきれいだよ、(45)これって塩辛いよ、を「自然である」とする見方はそれぞれ(9)56%から47%、(37)55%から48%、(41)61%から46%、(45)78%から57%のように減少している。⁶ このように2003年の方の許容度が下がっている例が見られることには1992年当時の「って」の用法がまだ不安定であったことに要因があると考えられる。現在、「って」と文末要素「よ」は、特殊な文脈を必要とする極めて限られた前提下で許容される例を除いて、共起しにくい傾向にあるが、当時は「って」が新たな意味機能を獲得していくゆれの大きい表現であったために、「...って...よ」も拡張的に用いられる傾向があった可能性がある。これに比べて、「って」と文末要素「ね」の共起はより容易になった、と見ることができる。⁷ このような「って」の許容度の変化の背景には、「って」が持つある種の文法的機能が関わっていると考えられる。また、これは「って」の使用に関して、文法的に許容されやすいものと許容されにくいものに徐々に明確化されていくことを予想させる。

以上、1992年と2003年の比較から判断する限り、「って」の許容度が全体として徐々に増加している傾向が見られる。「自然である」が増加していることから判断すれば、「っ

⁵ ただし、この比率に(22)あなたは面白い人ね、(23)山田さんは誰ですか、は除かれている。

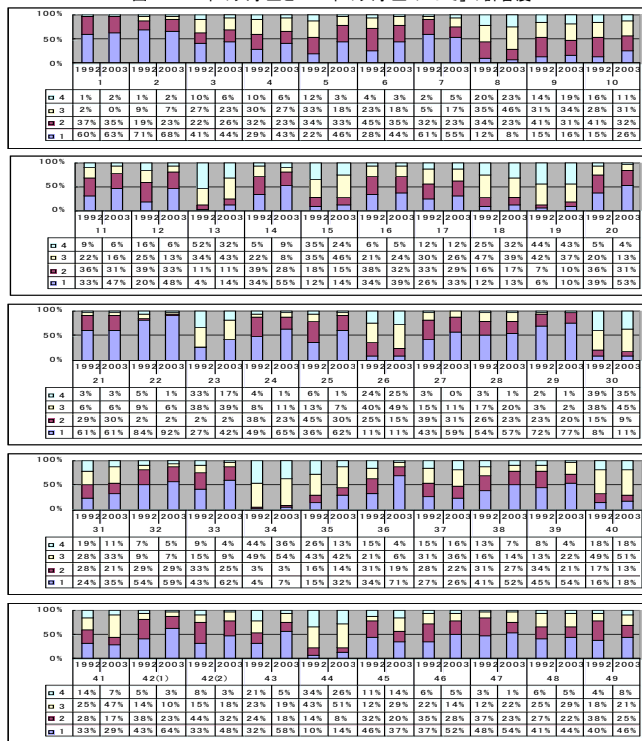
⁶ 「自然である」という判断が50%以上のものではないが、2003年の方の許容度が下がっているものとして(40)33%→31%、(44)24%→22%がある。これらも文末に「よ」が付いている。

⁷ <図1>の(1)、(3)、(4)、(16)、(17)、(21)、(28)、(29)、(32)、(33)、(35)、(36)、(38)、(39)、(43)、(47)、(48)、(49)がこのことを示している。これらの項目において「全く自然である」が全て増加している。

「って」の許容度

て」の若年層での定着が見られ、若年層内でのゆれは縮小していると言える。本来よく分からないもの、不明なものを取り立てる「って」が「よく知っているものを指す」という新たな意味機能を獲得する方向へ移行する傾向にあると言えよう。そして、この新たな意味機能の獲得によって「これって」のような直示的表現の使用が許容されるようになりつつあると考えられる。

図1 1992年の大学生と2003年の大学生の「って」の許容度



朴 序敬

3.2 2003年の大学生と40代以上の中高年層の比較

ここでは2003年の大学生と40代以上の比較を行う。40代以上を対象に行ったアンケートにおいても4つの選択肢を設定し、その選択肢から「全く自然である」と「自然だが若者言葉的」の答を「自然である」という判断であるとみなして考察する。各項目ごとの回答に占める4つの選択肢の選択比率は<図2>のとおりである。

全項目における「自然である」の比率は大学生64.9%、中高年層64.3%で、若年層の方が僅かに上回るが、ほとんど差はない。また、大学生と中高年層共に「自然である」(答①と②の合計)という判断が50%以上となる34項目に限った場合、許容される比率は大学生78.9%、中高年層73.0%で、若年層の方がやや高い。全体的に若年層の許容度がやや高い中、「自然である」と判断された34項目のうち、8項目(3)、(7)、(16)、(17)、(31)、(45)、(47)、(49)、1項目(6)は同率である)においては中高年層の許容度が高かった。さらに、4項目においては若年層が50%以下の許容度を示しているに対し、中高年層ではそれぞれ(9)47%→63%(+16%)、(35)45%→56%(+11%)、(37)48%→58%(+10%)、(41)46%→62%(+16%)であり、若年層より上昇している(「→」の左が若年層、右が中高年層)。すなわち、4項目のいずれにおいても「自然である」という選択が中高年層において増加している。これは大学生と中高年層共に「自然である」(答①と②の合計が50%超)と判断した34項目においても同様な傾向が見られる。つまり、中高年層が「自然である」と判断した34項目を調べると、「全く自然」が49.4%、「自然だが若者言葉的」23.5%で、34項目全てにおいて「全く自然」という選択が優勢に現れ、「自然だが若者言葉的」が優勢に現れた項目はなかった。中高年層が「って」を「自然である」と判断した回答のうち、「若者言葉的」という選択よりも「全く自然」という選択が直示的表現の「って」の使用を含む全項目において優勢に現れたことから、中高年層の多くは「って」を若者言葉として強く意識しているわけではないことが伺える。

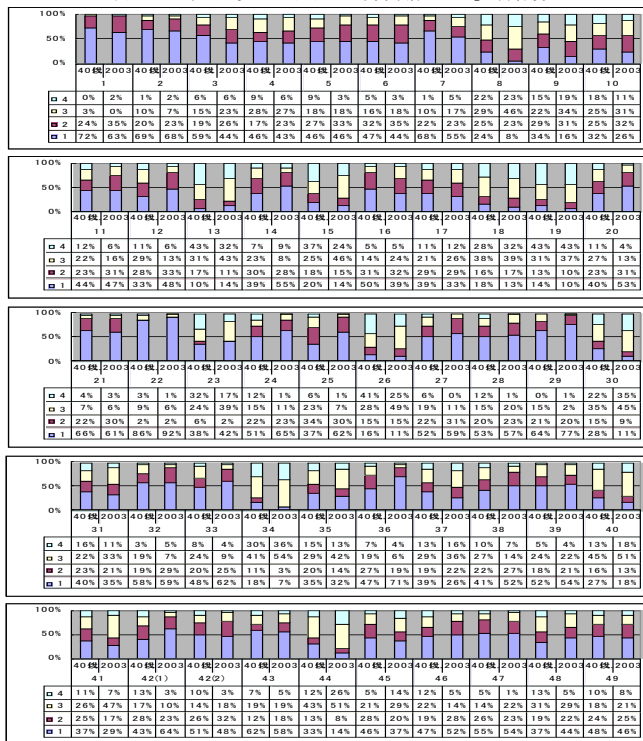
以上、1992年と2003年の大学生の「って」の許容度の相違、大学生と中高年層の許容度の差を観察した。その結果、10年を隔てた大学生間において、「って」の各項目における許容判断には大きな変化は見られないが、全体における許容度は2003年の方が量的に増加していることが分かった。つまり、適格性判断は同じパターン、同じ傾向であったが、許容比率が僅かでも増加しているものが多かったために全体的に増加したのである。そして、大学生と中高年層の「って」の許容比率においては全体的に大学生の方が「って」を「自然である」と判断する割合が僅かに高いものの、ほとんど差はなく、よく分かっているもの、近いものを取り立てる「って」の許容度には世代間に共通した傾

「って」の許容度

向が見られた。

以上の1992年と2003年の若年層の比較から、「って」の若年層での定着が見られ、若年層内でのゆれは縮小していることが分かった。しかし、1992年と2003年の間での中高年層間の比較ができなかったため、この段階では社会全体として「ゆれが縮小の傾向にある」とは必ずしも言えないが、少なくとも若年層の間ではゆれは縮小したと言える。

図2 2003年の大学生と40代以上の中高年層の「って」の許容度



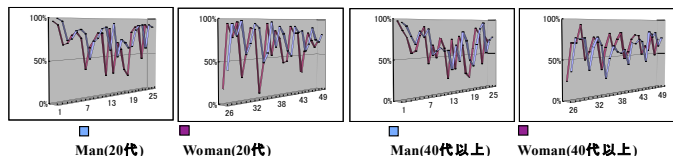
また、1992年の大学生に比べ2003年の大学生では「って」に対する若者言葉意識が弱まり、40代以上の中高年層においても「って」を若者言葉として特に強く意識してはいないことが明らかになった。なお、「って」が若者言葉の特徴の一つとされるほかしの表現効果に通じる一面があるものの、「って」の使用実態と若者言葉の意識との結びつきは必ずしも強いとは言い難く、「って」は若者言葉的ではない可能性も考えられる。そして、歴史的に「って」は「とて」が変化したものであると言われるように、「って」の出現、使用は突然変異的なものではなく、むしろ論理性を有するものである。したがって、「って」を若者言葉と見る見解も「って」の使われ方の全てにおいてではなく、ある一部の使用においてその主張が妥当性を有すると言えよう。また、「って」形式は一部の使われ方に認識差、個人差はあるものの、他の形式とは異なる、独自の用法を持つ言語形式であるという認識が広まっていることが本調査を通じて明らかになったのではないかと思われる。

4 「って」の許容度における男女差

本章では「って」の許容度における性差について考察する。性によって「って」の許容度に相違が現れるかどうかを調べるために、データを男女別に分けて考察する。

まず、大学生の男女間の許容度の差<図3>を見ると、男性のグラフと女性のグラフが同じ線状を成していることが分かる。全項目における大学生(2003)の平均許容度は男性63.6%、女性66.6%で、女性の平均許容度がやや高い。男女間の許容度の差が一番大きい項目は(9)「私(僕)、宮沢りえって嫌いです」の31%(男性32%;女性63%)で、次に(10)「私(僕)、地震って怖い」の26%(男性46%;女性72%)、(40)「君の大学の学生ってよく勉強するよ」の24%(男性19%;女性43%)である。全49項目中、28項目において女性の許容度が高く、2項目においては男女同率であった。

図3 「って」の許容度の男女比較



「って」の許容度

一方、40代以上の中高年層の平均許容度に関して言えば、男性65.2%、女性63.5%で、男性の方が若干高い。大学生の場合は女性の方が高い割合を示すのに対して、中高年層では男性の方が高い割合を示している。男女間の許容度の差が一番大きい項目は(5)「今日って何日ですか」の25%(男性85%:女性60%)で、次に(14)「この帽子ってどこで売ってるの」の23%(男性65%:女性73%)、(45)「これって塩辛いよ」22%(男性84%:女性62%)である。上述のとおり全項目における男女の平均許容度を比較すると、大学生が63.6%対66.6%、中高年層が65.2%対63.5%である。大学生、中高年層のいずれにおいても僅かな男女差しかなく、さらに男女が同じ線状を成していることから、その許容度は男女間で同じ傾向にあると言える。

以上、「って」の男女間での許容度を比較した。今回の調査結果では大学生では女性の方が、中高年層では男性の方が高い許容度を示しているものの、男女間全体での許容度には明確な性差がなかった。ただし、「今日って」、「この帽子って」、「これって」などの特定の表現に関して言えば、男性に比べ女性の方が「全く自然である」と判断している傾向にあることが分かった。⁸

5 まとめ

本稿は「って」の許容度に関するアンケート調査を基に、日本語母語話者の「って」の許容度の変化について考察した。まとめると、次のようなことが言える。

- (1) 約10年のスパンで考えた場合、「って」の使用の許容範囲が急速に広がっているわけではないこと、また、「って」には1992年、2003年ともに許容度の高い「って」と許容度の低い「って」が存在し、両年の間で類似した使用分布パターンを見せながら、全体として使用量が増加傾向にあることが観察された。言い換えると、「って」には

⁸ 男女の選択の比率を示すと以下のとおりになる。

表2 男女の選択の比率

選択肢	2003年の大学生		40代以上の中高年層	
	男性	女性	男性	女性
「自然である」(①+②)	63.6%	66.6%	65.2%	63.5%
①「全く自然」	41.4%	44.3%	42.5%	43.9%
②「自然だが若者言葉的」	22.2%	22.3%	22.7%	19.6%

朴 序敬

許容され易いものと許容されにくいものがあり、「って」が許容される条件は、1992年と2003年とで共通していると言える。

- (2) 大学生と40代以上の中高年層の「って」の使用許容度にも類似したパターンが見られ、「って」の適格性判断に大きな世代差がない。
- (3) 「って」の使用に対する若者言葉としての意識に関しては、2003年の大学生における方が1992年の大学生におけるよりも「って」を若者言葉とする意識が弱まっていることが分かった。さらに、40代以上の中高年層にも若い世代を中心に用いられるとされる「これって」を含む全項目において「全く自然である」という判断が優勢に現れていることから、中高年層に「って」の使用が若者言葉としてそれほど強く意識されているわけではない様子が観察された。このことは「って」形式が単に若者言葉の枠内でのみ用いられているのではない可能性を示唆しているものと考えられる。
- (4) 男女間の「って」の許容度の差に関しては、大学生と同様中高年層に共通した傾向が見られ、「って」の許容判断に性差による明確な相違は出てこなかった。ただし、「今日って」、「この帽子って」、「これって」においては男女差がはっきり見られることから、これらの「って」の許容判断に性差が大きな影響を与えていないとは言い切れない。

本考察の結果、1992年、2003年両年の若年層間の許容度の比較を通して、少なくとも「って」形式は流行しては消滅する若者言葉とは異なり、ある一定の方向性を持ちながら新たな形式として徐々に定着し、ゆれが縮小していることが分かった。特に今回ゆれを見ようとした、よくわかっているもの、近いもの、ウチのものを取り立てる「って」の使用について言えば、その許容度および認識が広まっていることから判断して、ゆれの縮小の傾向にあると言える。ただし、その形式の存在が一般に認められてはいても、個々の人々が同形式の表現のすべてを把握しているわけではないので、一つ一つの具体的な表現になると、許容の度合も異なってくると思われる。⁹ つまり、「あなたって面白いね」

⁹ 今回のアンケートは1992年に行ったものとの比較であるため、アンケート項目の提示順番も同じである。しかし、文法的適格性判断が類似した項目の並べ方はその文法的判断に何らかの影響を及ぼす可能性があることが指摘されている。そのため、類似した項目の並べ方が母語話者の「って」の許容度にどの程度影響を与えているかを調べるため、かき混ぜたアンケート調査を再度行った。被験者は名古屋大学学生男女30名で、2003年12月に実施した。その結果、項目(26)、(30)、(41)の3項目においてのみかき混ぜたものの方においてより高い許容度が得られた。その他の項目においては大きな相違は見られなかった。

は多くの人に許容されるとしても、「明日って暇?」などになると、個人によっては違和感を感じ、許容しがたくなるということも考えられる。

ある文が許容できるか、あるいは許容できないかの判断結果に相違が生じる理由は非常に多種であり、いろいろな要素と関わっている。文レベルで許容されても談話レベルで不自然になる場合やその逆の場合があるし、談話レベルでも文脈との整合性が関係していると思われる場合がある。今回のアンケートにおいて日本語母語話者の個々の容認性にずれが見られたのも一概には全て説明できない様々な要因があったと思われる。「って」は本来談話上で分析されるべきものであり、文脈設定なしで例文の許容度を判断するにあたってかなりの憶測が必要な場合もある。したがって、今回のアンケートの結果のみで「って」の許容度に関するゆれの全てを説明することはできない。

今回の調査は「って」という形式の文法的説明を目指す研究の準備段階として行ったものであり、「って」の許容度に関する1992年と2003年の(大学生の)時代差および2003年における世代差に焦点を当て、その社会言語的な傾向を探ったものである。そのため、許容度に関わる様々な要因については触れることが出来なかった。「って」の各用法と適格性判断における文法的、語用論的および談話レベルでの要因については別稿に譲りたい。

参考文献

- 梶原しげる(2003)『口のきき方』新潮新書.
- 鎌田 修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房.
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論—言語の機能的理論』大修館書店.
- 許 夏玲(1999)「文末の『って』の意味と談話機能」『日本語教育』101 日本語教育学会.
- 三枝令子(1995)『『って』の構文的位置付け—『と』による引用と『って』による引用の違い』『日本語と日本語教育: 阪田雪子先生古希記念論文集』三省堂.
- 榊原昭二(2003)『だから言葉は面白い』三省堂.
- 高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12-9 明治書院.
- 土井洋一(1964)「ことばの『ゆれ』」『講座現代語6』明治書院.
- 丹羽哲也(1994)「主題提示の『って』と引用」『人文研究』46-2 大阪市立大文学

朴 序敬

部要.

- 野元菊雄(1994)「ことばのゆれ」『国文学解釈と鑑賞』59-7 至文堂.
森山卓郎(1995)『『伝聞』考』『京都教育大学国文学学会誌』26 京都教育大学.
朴 序敬(2002)「主題提示としての『ッテ』の談話機能——人称代名詞に後接する『ッテ』——」『ことばの科学』第15号 名古屋大学言語文化研究会.
藤村逸子(1993)「わからないコトバ、わからないモノ——『ッテ』の用法をめぐって——」『言語文化論集』14-2 名古屋大学言語文化部.
米川明彦(1998)『若者語を科学する』明治書院.
————(1999)「手のひらの言語学」『月刊言語』28-5 大修館書店

付録 アンケート

- 1) イチローってすごい選手だね
- 2) (大きなリュックサックを指しつつ)これって重いのかな
- 3) (Aさんのお母さんに会い、数日たってAさんにお母さんってすてきな方ですね
- 4) (森の中で)森って暗いね
- 5) 今日って何日ですか
- 6) (マウスという名前ものを前にして)これって何ですか
- 7) マウスって何ですか
- 8) 私(僕)、宮沢りえって好きです
- 9) 私(僕)、宮沢りえって嫌いです
- 10) 私(僕)、地震って怖い
- 11) 地震ってこわい
- 12) この帽子ってどこで買ったの?
- 13) こんな帽子ってどこで買ったの?
- 14) この帽子ってどこで売ってるの?
- 15) こんな帽子ってどこで売ってるの?
- 16) その話って面白いね
- 17) この話って面白いね
- 18) (しばらく話したあとで)ところで、あなたってどなたですか?
- 19) (いきなり)あなたってどなたですか?
- 20) さっき来た人ってどなたですか?

- 21) あなたって面白い人ですね
- 22) あなたは面白い人ですね
- 23) (山田さんという人の情報を求めて)山田さんは誰ですか
- 24) 山田さんって誰ですか
- 25) このバスって名大へ行きますか?
- 26) こんな電話って便利?
- 27) この電話って便利?
- 28) あなたが作ったケーキっておいしいね
- 29) 田中さんの奥さんって美人だね
- 30) 田中さんの奥さんって会ったことありますか
- 31) あなた、ワープロって使えますか?
- 32) あの人って美人だね
- 33) あなたの作るケーキっておいしいね
- 34) あなたの作ったケーキっておいしかったよ
- 35) 田中君の書いたレポートってよくできていたね
- 36) 田中君の書くレポートっていつもよくできているね
- 37) (名大の先生が南山大の先生に)うちの大学の学生ってよく勉強するよ
- 38) (名大の先生どうして)うちの大学の学生ってよく勉強するね
- 39) (南山大へ教えに行っている名大の先生が南山大の先生に)君の大学の学生ってよく勉強するね
- 40) (南山大へ教えに行っている名大の先生が南山大の先生に)君の大学の学生ってよく勉強するよ
- 41) 君の目ってきれいだよ
- 42-1) 私の目ってきれいでしょ
- 42-2) 君の目ってきれいだなあ
- 43) この鮭って塩辛いね
- 44) この鮭って塩辛いよ
- 45) (テーブルの上の鮭を指して)これって塩辛いよ
- 46) (テーブルの上の鮭を指して)それって塩辛いよね
- 47) (国会での牛歩戦術を話題にして)あれっておかしいね
- 48) (国会での牛歩戦術をテレビで見ながら)これっておかしいね
- 49) (国会での牛歩戦術の話友達に聞いて)それっておかしいね

